

〔第19回日本家族看護学会学術集会教育講演〕

青年期ケースからみえてくる現代の家族

三田精神療法研究所

牛島 定信

現代の若者にみる無気力

第147回芥川受賞作（2012年度上半期）『冥土めぐり』（鹿島田真希作、文芸春秋・平成24年9月号）は、現代の家族のあり様をよく描いていて興味深い。

物語は、30代半ばの奈津子が、区の保養所が出している「宿泊割引一泊5,000円」のポスターを見つけて、肢体不自由者であり、知的障害となっている夫太一と二人で、一泊二日の旅行に出掛けるところからはじまる。この保養所は、かつては奈津子が子どもの頃に誇り高い母親に連れていかれた高級ホテルであり、今は、その面影もない貧素な宿泊施設と化しているという設定である。それは、奈津子自身が、裕福な家庭から現在の障害者との生活に墮した人生を辿っているということと符合する。このホテルは、奈津子自身、子どもの頃に何度となく訪ね、母親に何度となく一家が如何に素晴らしい家庭であったかを聴かされた思い出の場所であった。それだけに、二人でホテルに到着し、ロビーの佇まい、部屋の窓からみえる風景をみるにつけ、奈津子には、さまざまなが思い出されてくるのであった。彼女の家族は、父親の存在感がまったくなく、虚飾と虚栄に凝り固まった母親が状況を支配し、弟もまた同類の人物であった。父親の稼ぎを当然のごとく浪費し、父親が亡くなった後は、奈津子が母親の期待に反して結婚した生活力のない夫に、同じような要求をしてくるかの感があった。そんな中での夫の発病である。突然、けいれんを伴う脳病に侵され、またたく間に障害者になってしまったのだ。いわば、奈津子は、幼い頃から、母親と弟の虚飾と虚栄の餌

食にされ、名状し難い「理不尽と矛盾」の渦に巻き込まれ、無力なままに打ちひしがれた人生を歩んできたのであった。そんな思いに浸るのであった。

そして、旅行の後半になって二人で、美術館を、そして海辺を波に浸るなかで、夫のけいれん発作を伴う脳病の発症が母親や弟の理不尽な要求をきっぱりと断つものであったことに気づくのであった。何と絶妙なタイミングであったことか。この発作は、奈津子に絡まり、奈津子の魂を奪おうとしていた傲慢と浪費の茨のツタを一瞬にして切り剥がしてくれたのであった。夫太一は、彼女をすべての矛盾から解き放ち、好きなものを好きと感じ、嫌なことをイヤといえる人間にしてくれたのであった。障害者の夫が非常に大切に思え、理不尽も矛盾も理解できない患者であるが、聖なる存在であることに思い至るのである。

この一家のあり様が現代の一般社会を代表するものであるとは思っていないが、家族同士の結びつきが稀薄で、各自得手勝手に自らの欲望を追求し、弱いメンバー、あるいは思い遣りをもつ弱者を犠牲にするという家族像は、まさに現代的である。私たちの臨床現場にやってくるのは、こうした家族の被害に遭った人たちである。高校中退、ワーキング・プアなどの就労不安定者、職場イジメの末のひきこもりといった問題と心理的につながりのある人たちである。

一方で、私の注目をひくのは、表向きの存在感はないが、後ろからしっかりと家族を支えていたはずの父親が潰され、抹殺されていることである。

ことは、1960年に始まった

こうした無気力な人間がどのような経過を辿って形成されるようになったのであろうか。このような人たちが突然に現れたわけではないことは確かである。

ことは、1960年前後に始まったように思う。登校拒否、思春期やせ症の登場である。ここでみられた人格像は、幼児的な自我理想に圧倒された姿を特徴とした。これは、教育ママが一流大学・一流企業に向かわせようとして発破を掛けた末の我が子の姿であった。同じく女子では、男性と対等な活動することこそがこれからの女性の生き方だと、教育ママに檄を飛ばされたところがあった。そこには、些細な自己愛的な傷つきで潰れるという人間像があった。それが、70年代も半ばになると、男子では「退却神経症」(笠原)が話題になった。定職を忌避して、趣味に埋没する若者である。大学の授業を忌避し、部活の古墳発掘には玄人はだしといわれるほどの人間がそこに居た。さらに80年代も後半になると、趣味の世界からも撤退するようになった。5年も6年も家にこもって、医者になる、弁護士になる、小説家になると主張する若者である。社会的ひきこもりといわれた。

一方、拒食症の女子は、70年代になると手首を切るようになった(手首自傷症候群)。そこには、些細な心理的困難に直面して手首を切ることで不安を掻き消す姿があった。さらに80年代になると、過食や手首自傷とともに激しい幼児化を起こして母親との関係に埋没するようになった。境界性パーソナリティ障害と呼ばれる状態である。社会との距離はいよいよ遠くなった感があった。

そして、21世紀を迎えると、男子も女子も、臨床現場では、自己愛的、他罰的と呼ばれるうつ病の状態をみせるようになった。自己愛性うつ病、境界性うつ病という云い方をしている人がいるほどである。いずれも、社会的人格の部分弱体化し、自己感覚もまた稀薄になっているかの観がある。それらが重症になると、好きを好きと感ずることができず、イヤをイヤと云うことができない人間に限りなく近づくのである。

青年期人格の変容の背景をなす家族像

このような青年期の人格像が弱体化していく背景に、彼らを包み、成長を促すはずの家族像の変容があることも忘れてはならない。

私たち臨床家は先述のケースを追うなかで家族像を把握するわけであるが、それは個々の青年が自らの人格に組み込んだ両親像である。そういう視点から私たちが最初にみた家族像の変化は、登校拒否や思春期やせ症においてであった。登校拒否の子どもの治療をしていると、「お父さんみたいにならなかつたら、しっかり勉強しなさい」という母子関係が形成されていることに気づいた。その時、父権の失墜を実感させられた。思春期やせ症のケースでも同じ現象をみたものである。興味深いのは、当時、「マイホーム主義」なる家族運動が展開されていたことである。お父さん、仕事にかまけていると家庭で孤立しますよ、という警鐘を鳴らす家族運動であった。

さらに、私たちは、「家庭内暴力」という用語が専門家の間で流行る1970年を迎えた。この種の子どもではさらに父親の影が薄くなった感があった。ある青年が「うちの親は……」という云い方をするので、「それは、お父さんのことか、お母さんのことか」と問い直すと、「どちらも同じようなものですよ」という返事に刮目したことを今も鮮明に記憶している。そうした子どもの家庭内暴力に対して、両親は、夫婦二人そろって困り果てている。そして、70年代半ばには、「ニュー・ファミリー」が新しい家族として新聞等を賑わすようになった。夫も妻も、親も子も、みんな平等であるという観念が一般に浸透するようになった時代である。力強いはずの母親まで無力化しているかの感である。

1980年代になると、再び、家族像の変化をみるようになった。それは、新しいタイプの学校に行けない子どもが描く家族像である。ある男子高校生は、学友のイジメに反発できずに、無気力にひきこもるようになった。様子を見てみると、父親はアルコール依存症で精神科病院への入退院を繰り返す、母親もまた社会の片隅で店員をしながら生計を立ててい

るという光景であるが、注目したいのはその父親への苛立ちも恨みもまったくないかの心境である。菊池寛の『父帰る』にみるような、かつての父親の存在感ではない。そうした現象に気づいて周囲を見回すと、「シングル・マザー」なる用語が一般の話題になっているのであった。昔からある「未婚の母親」とはまったく性質を異にした母親である。この種の母親には、この子の父親という観念はないのである。

そして、1990年代になると、児童虐待が深刻化するなかで困った家族を見掛けるようになった。特に、性的虐待例がそうである。父親という姿をした男性がそこに居るかの印象を与えた。家庭内でもっとも重要な心理的課題である世代間境界が形成され難くなった姿がそこにあるのである。興味深いのは、この頃、「夫婦別姓」の法制化が話題になったことである。現在、まだ法制化されないままであるが、旧姓のままに公的な活動をする女性が増えたことは何か意味ありげな気がしている。

人格に組み込まれる家族像の変遷

父親の価値観、人生観等、いわば父親像が重要な役割を演じる家父長的家族は、そう長い歴史をもっているわけではない。20世紀になって現れた家族構造である。

この事情は20世紀前半の神経症をみるとよくわかる。例えば、S・フロイトの「ドラの症例」(1905)、「ハンス少年」(1909)、「ネズミ男」(1909)のいずれも、自らの本能活動をめぐって生じる父親への恐怖(懲罰不安)が主題となっている。わが国にあっても、森田正馬の治療ケースのいずれも、希望する将来選択を父親が許してくれるかどうか为中心的葛藤を成している。家族において父親が中心的役割を果たすのは何も神経症ばかりではない。明治初期から大正を経て昭和初期に至る代表的な小説をみても、ことは同じである。森鷗外、夏目漱石、山本有三などの小説を読んでも、父親の存在感が如何に大きいかは否定すべくもない。

S・フロイトが、「イド」、「自我」、「超自我」からなる人格構造論を提起したのは、こうした時代精

神を背景にしてのことであった。ここで注目したいのは、フロイトが父親を人格の重要な構成要因として据えた背景である。彼は、当時、人格の構成要因として重要な役割を演じていた宗教を排除することに一生懸命であった。『幻想の未来』(1927)、『文化への不満』(1930)で、彼は、宗教は現実的基盤をもたない幻想であり、強迫神経症であるとして、これからの人間は現実に存在する父親を人格の中に取り込むことで幻想から抜け出すべきであると論じたのであった。

その神が重要な役割を果たした人格像は、F・ドストエフスキ(1821~1881)を読むとよくわかる。『罪と罰』(1866)で、主人公のラスコニコフは、自由主義、無神論を唱え、自らを選ばれた人間として、何の価値もないと考えた質屋の老婆を殺害して、金銭を奪ったのであった。ところが、殺害を実行した後、烈しい罪意識に苛まれ、錯乱状態に陥ってしまった。その状況で、信心深い貧しい女の子が与えてくれた聖書の一文に、心を洗われ、混乱状態から抜け出すのであった。さらに、『カラマゾフの兄弟』(1880)は、農奴解放が進み、キリスト教が弱体化するなかで、一般市民が台頭する時代の様子を、カラマゾフ家の三人の兄弟に当時の若者の姿を描き出している。長男ドミトリーは、本能のおもむくままに自由奔放な生活に浸っていた。次男のイワンは、人格の中から神を排除して、良心の呵責を確立することこそ人間を自由にする道だと主張する無神論者である。そして、三男アリオウシャは昔ながらに神に仕える人間である。そのなかで、父親が死体となって発見される事件が発生した。当時、父親と対立していた長男に疑いがかかって逮捕された。ところが、真犯人は、イワンの影響をつよく受けた召使スメルジャコフ(父親が白痴の女性に産ませたと云われる)であった。このことを知ったイワンは、烈しい罪意識に襲われて錯乱状態に陥るのであった。興味深いのは、冤罪のためにシベリアに流刑された長男ドミトリーも、錯乱状態に陥ったイワンも聖書の力に救われることである。

いずれも、神の存在を非難し、自由を求めた若者が、罪を犯して大混乱に陥ったとき、結局は、神に

救いを求めるという筋書きである。

以上、19世紀の人格では神が大きな要因として機能したが、20世紀になると神に代わって父親が荘重な存在として立ち現われるようになった。しかし後半になると、その父親像も稀薄になっていき、代わって母親が描く社会通念、いわば戦後民主主義が作り出したイデオロギーを基盤にした価値観が青年の人格を支配するようになった。「自我同一性」(EH・エリクソン)と呼ばれた価値体系である。

それでは、現在の青年期ケースでは、その家族はどのようなになっているか。

最近の青年期ケースにみる特徴

2つのケースを呈示することにする。

ケース1は女子中学生である。うつ病の母親と一緒に受診した。小学3年頃から、いじめによる不登校に陥り、近くの離島に転校することで何とか通学を続け、中学もそのまま離島の中学校へ進んだ。この8月に父親の転勤に伴って上京し、9月からの中学校への準備に受診したのであった。案にたがわず、登校するとすぐに不安となって保健室に走り、翌日には救急でクリニックを受診した。

学校から帰宅すると、すごく緊張して、涙を流しながら、親の育て方が変わったと興奮気味に大声を出し、母親が対応にもたついていると死ぬといってベランダに駆け寄る、その光景に母親はいよいよ呆然自失の状態となる、すると、B子はさらに暴れ出すという事態へと発展するのであった。彼女によると、登校できないとすべてがダメになった、将来への途が断たれてしまった、死ぬより他にないということになるらしい。

そこで、こんなときは無理して学校に行くことはない、代わりに母親が学校と掛け合って卒業を保証してもらうこと、高校受験をしたかったら塾その他で補うことなどを告げると、B子は、「お父さんは、学校にちゃんと行きなさいといっている」といって不安はなかなか治まらない。

ケース2は男子大学生である。幼い頃から完璧主義で生真面目、マニュアル人間であった。中・高・大の一貫校で現在の大学に入学したが、2年ほど留年している。この2年、卒論に取り組んでいるが、自分で考え、自分で資料を集めることを奨励する大学の伝統があって、卒論では友だちと競合することが多くて、どうしても気圧されてしまう。結局、落ち込んでしまった。このままだと、大学院に行く気力もないし、企業に勤めたとしてもやっていける自信はない。八方塞で、時には死ぬことも考えるという。

次回、「昔から人生上の重要な事柄をめぐって、自分で決断したことがない、すべて親任せ、成り行き任せであった。友だちとの関係でも周囲に合わせるばかりだった」という。さらに、成功した先輩の「マイナス思考を排除すべし」といった発破を掛けるような講演を聴いても、すぐにダメだという気もちになりやすい。兄なんか要領がよくて、積極的に自分の人生を切り開いている。自分はとても敵わない。考えてみると、幼稚園の頃からイジメに遭ってきた。公園で親同士楽しそうに談笑しているが、子どもだけの世界に投げ込まれて恐怖している自分には見向きもしない母親の姿は今もはっきりと浮かんでいる。小学校に上がって不登校になったときも、それならと転校させられた。

以上の2つのケースに共通することは、かつての教育ママの時代と比べると、母子間がとても稀薄になっていることである。両ケースとも、自分のことが忙しくて、我が子の危機状況にきちんと対応できない、それだけに自我支持的な母親が人格内に形成されていない。教育ママの時代には、友だちから聞いた塾の話をする、未だ通うことまでは考えていないのに、母親が出掛けて塾の案内や入塾の手続き一切を整えるほどで、過干渉な母親という言葉が流行った。あるいは、大学生になってもまだ入学式に当然のごとく姿を現して「子離れの悪い親」と表現されもした。それだけに、「ひきこもり」(1980年代)になってもまだ母親の意向を受けて、医者になる、弁護士になる、物書きになる夢を捨てることがなかつ

た。最近のケースには、そうした内的な夢がないか、あっても稀薄になったし、危機状況で他に助けを求めることさえできない若者が多くなった。その典型に、中1ギャップ、高校中退者、ワーキング・プア、若いホームレス、妊娠しても医療機関と接触を持つことなく、陣痛が始まって救急車を走らせる若い女性などがある。あるいは、上司に怒鳴られてうつ病になって休職になると、途端にゴルフ、海外旅行、同棲生活と元気になるが、その実、内心は将来を描けずに戦々恐々としているヤングアダルト世代の新型うつ病者もそれに含まれるであろう。

これと関連してもうひとつ述べておきたいことは兄弟の関係が稀薄になっていることである。従来、「兄弟、^{かき}牆にありて^{せめ}鬨げども、外其の^{あなどり}務^{ふせぐ}を禦」といわれた。家にあっては足の引っ張り合いばかりしているが、一步、外に出て兄弟が辱めを受けるようなことがあれば身体を張って護るものだという意味である。ところが、最近のケースでは、こうした兄弟間のつながりが見られ難くなった。ケース2がそうである。兄は活躍しているが、それに助けられることはない。ある40歳のひきこもりケースは、ひきこもりが始まった高校1年以来、4人の兄弟とはまったく接触がないという。弟が烈しい虐待を受けている兄が何ごともなかったかのように普通に登校していることも稀ではない。人生のある段階で、両親を2階に上げて、自分たちだけの世界を形成し、両親をあれこれと評することは、人生で最初の世代間境界の形成であり、子どもが社会的に自主性を示す最初のチャンスといってもよい。これが稀薄になった。

これと関連して、東京都の教師のメンタルヘル스에経験の深い真金は、小学校の先生の一番の負担を生徒同士の関係ができ難いことであると述べている。つまり、ある生徒は担任教師と個人的な関係をつくることに何の困難もないが、生徒間の連携ができないために、同じ質問に何回となく応えなければなら

ないという。ひとりの生徒に明日の予定を説明してやると、それが他の生徒に伝わり、それがまた別の生徒たちに拡がるというのが一般的であるのに、それがみられないのである。家庭内にあっても、学校にあっても、横の関係ができ難くなった。

この兄弟関係をめぐる現象は、さらに、最近の子どもたちの対象関係のありようをよく説明するよう思う。それは、最近の子どもが眼前の対象の影響を受けやすい関係である。最近の子どもは、先生(教師)用の顔、同級生向けの顔、親向けの顔その他をもっていて、個人の個性を示す一貫性のある態度を示さなくなったという言い方をされることもある。最近のイジメをめぐるNHK(アサイチ)で、親友的な雰囲気ですっかり信用していた友だちが、他の集団に行くと自分を裏切るような言動をとることが実に簡単に起こるようになったという報告をしていた。この種の話は枚挙に暇がない。

おわりに

最近、無気力な若者がいろいろな場面で報告されるようになった。最新の芥川賞受賞作『冥土めぐり』を読んで、ここにもまたの印象を受けたのであった。

考えてみると、人類は、その人格のあり様を時代とともに変えてきた。19世紀では神が重要な存在であったが、20世紀になると神に代わって父親が登場した。しかし、それも20世紀後半になると、その父親像が急速に稀薄になった。そして今日を迎えている。

それは、父親に代わって強力であった母親の姿さえも、また稀薄となり、若者の無力化が一段を進んだように見える。

今後、どのような経過を辿るのか、家族に親しく接する職業人にとって、目が離せない事態である。そんな気がしてならない。『冥土めぐり』が解決を求めた神以外に救世主いないのであろうか。